

翻訳

耕作を強制されるひとびと（三・完）

——ネパールの農業経済における奴隸的労働

桐村彰郎（訳）

彰郎（訳）

イントロダクション

第一部 ネパールにおける奴隸的労働

第一章 ハリヤ・システム・西部丘陵における奴隸的労働

第一章 平野部における債務奴隸制

第三章 カマイヤ・システム

第四章 奴隸的労働システムにおける女性と子供

第五章 日雇い賃金の変遷

第六章 地主と地主當時のハサウエー

第七章 カリスト、エスニツク集団そしてアンタツチャビリティ

第三部 记念文

第八章 南アジアの文脈における債務奴隸制
（以

(以上 第一七卷一・二号)

第九章 非政府組織の奴隸的労働に反対するイニシアティヴ

第一〇章 政府の行動

第四部 結論と勧告

第一一章 結論と勧告（以上本号）

第九章 非政府組織の奴隸的労働に反対するイニシアティヴ

（写真略、キヤプ・ション・黒板のネパール語を指して「サンガタン」＝組織という語を示す教師。一言葉は「組織」を意味する「サンガタン」。若きタルーの活動家、バジヤル・チヨーダリーが、ナムバスタVDCでのインセックのカマイヤ夜間識字学級でおこなう授業から。）

もしわれわれがわれわれのなかで働き、共に働くなら、それは組織である。われわれは組織という形を持つており、共に学び団結し、より遠くまで届くことができる団結した声をあげるために、（1）

過去一〇年で、ネパールでは奴隸的労働の問題についての認識の成長があった。たとえこれがこれまでのところもっぱら極西部のテライの地域におけるカマイヤ・システムにのみ焦点が当てられたにしても、である。それは主として若干のNGOや個々の活動家の活動の結果として出てきたものである。このような問題に公然と闘うというNGOの能力は、一九九〇年の多党制政治システムの確立後に増大し、そしてカマイヤ・システムにたいする闘争が実際に始まったのはその時からである。

デモクラシーの到来はまた、先住民諸集団の代表やその他のカースト・システムで低い地位をもつ人びとの代表に、いつそう声をあげてカースト構造に挑戦するよう力づけた。かれらはこの分野でいくらか成功をおさめたが、しかし、一般的に言って、一方ではカースト・システムと、他方ではハリヤならびにカマイヤ・システムの労働の搾取との間に関連をつけられなかつた。

本章ではこれらの問題に取り組むなかでNGOの役割を見る。

カマイヤ・システム

特にふたつのNGO、後進社会教育（BASE）およびインセックが、包括的プログラムの展開において率先し、問題に取り組んだ。両者はカマイヤの間の高レヴェルの非識字（九六%）をその搾取の主要因と見きわめ、カンチャンブル、カイラリ、バルディヤ、バンケおよびダングの諸郡でカマイヤのための非公式教育（NFE）の授業を導入した。もっと最近になると、かれらはカマイヤの子供たちの特別な問題に対処するために別個のプログラムを開発した。

識字学級はいつでも、カマイヤがその権利を主張するのを助けるために、かれらをエンパワードするというより広い動機を持つていた。BASEは「変換のための教育」というフレーズを作りだしたし、他方、インセックは最初からその識字学級の要素として人権意識と人びとの組織化の両方を含めた。

一九八七年BASEはダング郡の二つの村、チャウクラとバイブングでストライキを組織した。ストライキはマギ〔Maghi〕にはじまつたが、一ヶ月しか続かなかつた。関係するカマイヤが飢えはじめていたからであつた。結果として、BASEは今後の直接的対決を避けて、その代わりに全体としてタルーのコミュニティの長期のエンパワーメントに集中する、という戦略的決定をおこなつた。その後に展開した諸プログラムは所得の創出と貯蓄という計画および法的支援の提供を含んだ。アプローチは成功だつた。そしてチャウクラVDCのメンバーで彼自身が前カマイヤだったクリシヤル・チヨーダリによれば、今や村の人口の約半分しかカマイヤとして働いていないし、かれらの受け取るビガ（現物報酬）のレヴェルは四〇%分増加した。彼が言うには、それは「まるで天国と地獄の違いのよう」である。

インセックのプログラムは、一九九〇年の政治的変化という分水嶺の後にはつきりとはじまつたものだが、最初からより対決的アプローチをとつた。最初、五つの問題郡の各々で一二ヶ月学級のために八つのカマイヤの村が選ばれた。学級は翌年には他の村に移動する。このようにして、インセックはシステムに挑戦するために、地元の行動を支え調整するカマイヤの活動家や教員の強力なネットワークを構築することができた。

（写真略）ラム・クリシュナ・チヨーダリ

ラム・クリシュナ・チヨーダリは二四歳で、カイラリ郡のジャナキ・ナガル出身のカマイヤのリーダーである。かれは一九九

四年にカマイヤ・システムからどうにか抜け出した。かれは子供の時五年次まで教育を受けたが、しかしその後事情が変わって、カマイヤとして働き始める以外に選択がなくなつた。

地主の農場にはわれわれ一人のカマイヤがいた。われわれはすべての野良仕事をやつた。地主は働かなかつた。一般的だつてかれらは方法がわからなかつた。大変厳しい仕事だつた。われわれは午後九時に寝たが、働き始めるために再び真夜中に起きなければならなかつた。わたしは完全に地主の支配下にあつた。この仕事すべてのために一年に一一袋の穀物を得た。それは生きるのに十分なものではなかつた。わたしは六年間そのようだして働いた。

一九九四年にわたしは去らねばならないと決心した。ボルとは非常に難しかつた。わたしのサウキ（負債）は一五〇〇キペール・ルピー（四五・〇〇〇ドル）だつた。地主がわたしに約束の額のビカを支払つたことがなかつたので、わたしは地主に負債を支払つことを拒否した。わたしはかれに「まずあなたがわたしにわたしのビカを支払う、それからわたしがあなたにサウキを支払つ」と言つた。五月に地主は警察を連れてきた。わたしは逮捕され拘留されたが、すべてのインセックの活動家がわたしを支持したやつをきた。とうとう地主はわたしにわたしのビカを支払い、そしてわたしは村落開発銀行からのローンで負債を支払つた。

今わたしは大工として働いていて、生活はなお樂ではないが、以前とせども大きなかつがいだ。わたしは自由で独立して生じと感じてゐる。わたしは必要な時に仕事をする「」がである。わたしは他のだれからも支配されないだら。

インセックとわたしは今カマイヤの村々の人ひとと一緒に活動してゐる。われわれはひとつコムニティを作つた。そしてわれわれは人ひとにその権利を自覚させつゝある。このカマイヤにとって状況は改善しつつある。ひととは識字プログラムのために自覚しつつあるのだ。かれらは他に授業からだへかへの「」を得てゐる。わたしは、この「」は廃止にかかるだらうと思つが、時間がかかるだらうと思つてゐる。

わだしこのよつてな長じ時間をおひそめられた。われわれの祖先もまたおひそめられたが故にかれらは搾取された。もしわれわれが恐れないとすれば、多分われわれは次の世代がカマイヤである」と思つたのかね」とがわかる。

地主を変革すること

予想どおりに、インセックもBASEも最初は地主からの激しい抵抗に遭遇した。しかしながら、プログラムの組織化でより広いコミュニティを含めることによって、かれらはこうした問題のいくつかを克服することができた。BASEの戦略は常に全体としてタル・コミュニティの諸問題を提示することであった（その参加者の一六%が実際にカマイヤとして働いている）。かれらはまたそのカマイヤ集会に出席するよう地主を招待する。

インセックは、かれらが活動する村々のいくつかでカマイヤ支援委員会を導入した。それはカマイヤではないが、彼らの地位に同情する著名なコミュニティのメンバーから成る。これらの委員会は地主も同様に含む。そしていくつかの場合、最初の抵抗は積極的な援助に転換した。

実際、システムを改革するために積極的に働いている地主も若干いる。モハン・シング・ラトールはプラタブルVDCの地主である。かれは大学教育を受け、カトマンドウでの公務員のキャリアの後、農場主として働くために帰ってきた。

わたしはカマイヤ・システムが好きではなかつた、あるいは賛成ではなかつたが、ここへ来た時には現実の選択肢はなかつた。インセックがやつてきた時、わたしはそれと一緒に活動して幸福だつた。わたしはカマイヤをもつておらず、徐々にかれらを助けるよう努めていた。わたしはかれらにその財政的立場について注意深く助言する。わたしは一人のカマイヤに一万ネペール・ルピー（一八〇・〇〇ドル）を支払つた。そしてどのようにしてかれがわたしのために一年間働いてそれを元済で返せるかを、かれとともに考へ出した。現在かれは自由で給料ベースで働くことができる。

問題への解決には地主の関与が不可欠である。かれらが局地的にも国家的にも依然非常に強力な集団であるだけではなく、また考慮に入れられるべきシステム改革の実地問題に重要な洞察力をももつているのである。モハン・シング・ラトールは続ける。

実際にはカマイヤ・システムは偽装された失業という農村地域における一般的な問題の一端である。基本的に、一年をとおこ

て、一日三三〇～四〇ネパール・ルピー（〇・五四一〇・セブン・ゼット）という現行レートを労働者に支払うのを正当化する十分な仕事がないのである。カマイヤ・システムではあなたは一年中カマイヤを置いておかねばならない。地主がカマイヤを搾取する「ことなしにカマイヤ・システムを使うのは経済的ではない。われわれは、カマイヤがピーカ時に賃金労働者として働いてその仕事に適切な賃金を受け取ることができる、それからその年の残りの期間自由に他の仕事で働くことができるようシステムを⁽³⁾持つべきである。これは今のところ可能ではない。なぜなら他の雇用機会が実際にはそこにはないからである。

模範的な闘い

BASEが少数の活動家から成る小さな組織として設立されたのは、ちょうど一〇年前だった。インセックがカマイヤ・システムの基準線調査をまず実行したのはたった五年前だった。両組織ともその後激しい国内的、国際的なロビー活動と宣伝活動に参画していき、同時に草の根で共同作業を遂行した。この結合したアプローチは大変成功した。現在までの成功の頂点は一九九六年のはじめ、カマイヤ・ムクティ・マンチ（カマイヤ解放フォーラム）が発進したことであつた。

カマイヤ・ムクティ・マンチは主として、地元のカマイヤ諸集団や教員たちやタルーの活動家たちとともにインセックが参加したことの成果である。その理事会は、過去五年を超えるインセックの仕事をつうじて出現してきたカマイヤのリーダーたちと人権活動家たちである。それは現在公式にネパール労働組合一般連盟（GEFONT）の翼下の自治組織として登録されている。何千人という多くの人びとが、その大きな割合はカマイヤであるが、一九九六年一月二十五日バンケ郡のネパルガンジでの開会演説を聞きに集まつた。演説するものには、地元の政治家たち、前首相、それにインドで長い間奴隸的労働にたいして闘つてきた、インドのバドゥア・ムクティ・モルチャ（奴隸解放戦線）の議長のスマニ・アグニヴェシュが含まれていた。

だれも、とくにカマイヤ・ムクティ・マンチは、カマイヤ・システムが打破されているというつもりはない。だれもがシステムはネパールの西部諸郡でなお堅固に塹壕で囲まれており、長い道のりがかかるということを認識している。しかしながら、組織の発進は前方への大きな一步を記すものであり、比較的短期間にNGOが達成できるものの実例である。カマイヤ・システムに取り組むNGO諸活動のなかで非常にリアルなかつ実証可能な成果は、近年ネパールの人権分野で生じた最も有意味な展開のひとつである。明確な文化の変容が西部テライで生じつつあるのだ。一〇年前には不可能だつたうようなやり方で、カマイヤ自身が公然

とシステムに挑戦するようになつてゐる過程が進行中なのである。

カマイヤ関連グループ

この報告は主としてインセックとBASEからの資料で作成されているけれども、カマイヤ・システムに反対するプログラムに関係した若干の他の重要な国内的、国際的組織がある。

一九九七年はじめに、これらの組織は、インセックが最初の年に調整の役割をして、「カマイヤ関連グループ」を作ることを決定した。グループの中核メンバーに含まれるのは、カマイヤ解放フォーラム、BASE、インセック、GRINSO、RRN、DANIDA、ルター世界奉仕団、セイヴ・ザ・チルドレン（US）、ユニセフ、アクション・エイド・ネパール、SAPネパール、UNDP、社会福祉評議会およびプラン・インターナショナルである。グループの目的は、カマイヤ・システム廃止のためにさまざまな戦略について情報を分かち合うこと、地域レベルでプログラムを調整しプログラムの拡大のために優先的なエリアを見きわめること、そしてカマイヤの利益のため法律の執行あるいは改正に強力なロビーを形成すること、である。広範な専門知識と機略をもつこのような諸組織の一集団が出現したことは、非常に元氣づけられる発展である。「グループ」は、國の他の地域に存在するカマイヤと同様の奴隸制類似の榨取形態について関心を持つていてそれをすでに表明している。

当時と今

NGOプログラムの効果は中西部ネパール、カイラリ郡のプラクタップルVDC出身のジョシ・ラム・ヨーダリーのような人びとには非常に強力に感じられている。かれはこのような公然たる反抗が可能である以前の日々を苦い思いで覚えている。

ジョシ・ラムは年齢は不確かだが大体六〇歳だと思っている。一九七三年かれはシステムがどのように地元の地主によつて徐々に変えられつつあるかを気づくようになり、それに介入しようと努めた。かれは以前に一〇年間カマイヤとして働いていた。

当時一九七二年頃までは、ピカとしてカマイヤに小区画の土地を与えるといふシステムがあつた。これはカマイヤたゞつてまつたくよいシステムだつた。しかし地主たちは貪欲になつて、土地の代わりに一一袋の米を与えるといふ変更を決定した。かれ

らは一緒に农作物に新しい取り決めを受け入れるよう迫った。

ジョシ・ラムは地主の意図がなんであるかを理解したとき、その村のすべてのカマイヤに接触して警告した。

朝になるとかれらの誰も働きに行かなかつた——たつたひとりの人だけだつた。すべての牛は内部に置かれたままだつた。それで地主たちは大変恼み怒つた。翌日かれらはわたしを探してやって來た。「五人の地主がいた。わたしは一人である」とがわかつた。かれらはわたしを捕らえ、わたしはカマイヤのリーダーであるとして責められた。かれらは、わたしがストライキを組織したので、失われた生産についてわたしひとりが告発されるだろうと言つた。かれらはわたしにジタタコチナラ（「靴の花輪」）を与え、わたしは村全体の前でおおっぴらに屈辱を受けた。わたしは村を去る他なかつた。わたしひとりが選び出された——残りのすべては農場主のところへ戻つていつた。

プラクタブルに戻ると、ジョシ・ラムの息子のフィロラルが今やインセックの活動家として闘いを取り上げていた。ジョシ・ラムはシステムへの挑戦を助けるには外部の支援が大きな要因になると信じている。もし一九七三年にわたしを助けるために人びとがそこにいたならば、わたしはそのストライキに勝利したであろう。今では地主ができるだろうとはわたしは思わない。

ハリヤ・システムに反対する活動

多くの人びとはネパールに奴隸的労働が存在するということを今や認識しているけれども、この問題はカマイヤ・システムだけよりも広いのだということを認識している人はほとんどいない。ハリヤ・システムにおける奴隸的労働に取り組んでいるNGOは本当にほとんどなく、この報告はさまざまパターントの搾取への最初の実際的な調査を提示するものである。しかしながら、間接的にハリヤの諸問題に取り組む、低位カースト諸集団に関する活動は存在しているのである。

「持続可能な暮らしフォーラム」（SLF）は、バグリング郡とパルバト郡の増えていく村々でもっぱら「アンタッチャブル」諸

集団とともに働いている。SLFは大人や子供の識字学級を組織することで村びとへのアクセスを獲得したが、それは諸問題を議論し解決が示されうるようなフォーラムを準備する。アプローチは控えめで、可能な限り外国の資金組織からの援助に依存するのを避けている。その代わり、理論的に利用可能なさまざまな政府事務所や地元施設を使うよう村びとを励ますことに努力が集中されている。可能な場合にはどこでも、村びとは自分たちでその問題への解決を見つけることに熱中し、必要な場合には、財力、労働力やアイデアを与えることに夢中になる。

サルヤンタルの村はパルバト郡にあり、バグラングの町からカリ・ガンダキ渓谷を歩いて上がって一、三時間である（西部ネパール）。SLFの支援で村落委員会が低位カースト・コミュニティによつて、またそれのために設立された。

以前は指定諸カースト（低位諸カースト）は一集団として村落内で実際のアイデンティティを持つていなかつた。そこにはすべてバラモンによつて支配されていたからである。指定諸カーストは常に後者の道具として働いた。村落内でのわれわれの存在は彼らに自分自身で組織しようとするある種の確信を与えた。⁽⁵⁾

渓谷のさらに下のシルミの村では、SLFが関わるようになつて後、女性グループが村びとによつて設立された。それは二年間運営されていて現在六〇名のメンバーがいる。委員会の議長、チャンドラ・カミは、ハリヤ・システムに関して何ができるかを描き出す。

高位諸カーストからの抑圧があまりに大きかつたので、委員会が形成された。われわれはハリヤの賃金を増すためにデモを組織した。いくらか暴力が生じた。一五日間われわれは、男たちが耕しに行くのを許さなかつた。地主たちはわれわれに石を投げ、棒でわれわれを打つたが、しかし一五日後にかれらは集会を開いて賃金の増加に同意した。

しかしながら、賃金の増加は結果として男たちの間にアルコール消費の増大をもたらした。同じ委員会はその問題をもまた提示

した。

われわれは男たちが飲んだりギャンブルをしたりするのを止めた。少し金が入ると、かれらはそれを飲むことに使ってしまう、妻や子供を打つたものだった。今やそれは止まっている。⁽⁶⁾われわれはかれらがアルコールを飲むのを許さなかつた。われわれを強くしたのは团结だ。

草の根レヴェルでのこうした活動の実例に加えて、カースト・システムに挑戦する全国的レヴェルでの動きがいくつかあつたが、それはまた間接的にハリヤの状況に影響をあたえうるものでもあつた。一九九二年にマン・バハドゥル・ビシュワカルマとマノハル・ラル・バムレルが、「伝統的な」カースト慣行を続けることを許しているマルキ・AIN（民法典）における一九九一年条項を廢止しようとして最高裁判所に請願を提起した（四四ページ〔訳では「第一七巻一・二号」一七四ページ〕を見よ）。請願は支持され、マルキ・AINは修正された。法律は現在、だれもカーストを理由として寺院や公衆の利用する場所で他のいかなるものも差別してはならない、と規定する。

現在では「アンタッチャブル」の状況を是正するために活動している若干の組織がある。これらはさまざまな政治的提携を反映する。プーラン・ラム・ディヤルはロハール（鍛冶屋）カーストに属するが、かれはバイタディ郡のある辺境村出自の小学校の教員である。かれはまた、被抑圧カースト解放協会すなわちSLOCネパール（Nepal Uptidit Jatir Mukti Shamaj）のメンバーでもある。かれは村内で活発に動いて、コミュニティがその権利を主張するのを援助している。

われわれは自分のカーストを恥じてはいなし。自分のカーストを誇りだしてはいる。わたしが自分のカーストを変えたくなし。スープー・カーストの振舞いを変えたい。傲慢であるのは、教育されなければならぬなしのまゝかれらである。ソノには変化は少しあつたが、ほんの少しだしかない。少なくともモクタリーだわれわれは思い切って意見を言う権利を持つてはいるのだ。⁽⁷⁾

少収入の所得創出、貯蓄およびクレディットの計画

カマイヤ諸集団の間で所得創出、貯蓄およびクレディットの計画を用いて実験が成功した若干例がある。そのたいていは女性を目標にしたものである。政府支援のリハビリテーション計画が欠如しているなかで、ますます諸NGOは奴隸的な家族のもうひとつの収入源を提供するために、このような計画に向かっている。

BASEは、米の少量貯蓄がカマイヤ家族から中央に集められる貯蓄制度を使って実験し成功している。貯蓄はBASEからのぴったりあつた助成金によってつぎ足され、そして、中央の資金は山羊や豚の飼育のような所得創出計画に資金供給するためのクレディット源として用いられている。シルミの女性集団（上述の）もまた、通常は小規模の畜産プロジェクトあるいは生育中の果実用樹木種苗場だが、貯蓄計画や所得創出プロジェクトを設立している。

両者の事例では、計画は奴隸的労働家族の女性を目標に定めている。そして、この計画は、重荷を負いすぎている女性のために特別の作業を意図したものである一方、女性の自信を強めることや、彼女らにいくらかの独立と、家計やものごとの決定についてそういう大きな発言権を与えることに成功している。以前に述べたシルミの女性委員会の事例では、女性たちは明らかに債務奴隸制から彼女たちの家族を解放する方向に向かって印象的な一步を進めようとする確信を与えられているのである。

しかしながら、所得やクレディットの計画は奴隸的労働の問題解決にたいする容易な解決策として見られるべきではない。最近の世界の他の地域からの調査が示すところでは、たいていの場合、最も貧しい女性たちは、そのはじめの力量ベースの低さや、技能の欠如や市場との接触の欠如のために、個人的および集団的な、両方の貸与プログラムにおいて、飛び越えられるか、あるいは利益を得ることが最も少ない。⁽⁸⁾こうした発見は、主な受益者がキチン・ガーデン用の自分自身の土地を少なくとも持つており、また相対的に少額の負債をもつている家族であるようなネパールでは、すくなくとも表面的には支持されるように思われる。地主の土地に住みかつ負債を抱えている最も搾取された諸集団にとっては、所得創出のための選択肢は極端に制限されているのだ。こうした環境では、ハリヤが自分の所得を増やすためにおこなういかなる努力の結果も破壊される。なぜなら、地元の金貸しあるいは地主が、どんな臨時所得もその負債の利子として即座に押収するからである。ハリヤ諸集団に所得の創出を困難にするもうひとつ問題はかれらが「アンタッチャブル」だとみなされている事実である。バジャング郡出身のビル・カルキは次のように説明する。

われわれはそのカーストのためにとても差別されている。かれらはわれわれにとても屈辱的な言葉を使う。われわれはミルクやあるいはギー（澄ましバター）さえも売ることができない。それで貧乏なままでいたなければならない。⁽⁹⁾

所得およびクレディットの制度は通常小規模で、関係者の現在の収入に取つて代わるというよりも、むしろその所得を補助することを企図している。農業労働者に実際にもうひとつの雇用を提供することはまれにしかない。これは特に、より辺境のエリアでは真実であるが、そこは、果物やあるいは家畜のマーケットで成長があるような町や道路の周りで生ずる発展とはほど遠いところである。

所得の創出やクレディットや貯蓄の制度は確かに果たすべき役割をもつてゐる。多分、その最大の適用可能性は地元マーケットに近接した丘陵諸エリアにある。そこではたいていのハリヤの家族は、換金作物を育てたりあるいは山羊や鶏を飼育したりできる家庭用のいくらかの土地をすくなくとも持つてゐる。丘陵部のハリヤのなかには、負債奴隸関係がより明らかに男性家族メンバーに限定されるというケースもあり、そしてそのようなものとして、女性メンバーが自分達の生産物のキープを認められるのはもつとありそなことである。

NGOの可能性の限界

NGOプログラムが作動しているところでは、それが被抑圧関係諸集団にエンパワーメントしていることはほとんど疑いはない。カマイヤ・システムの場合には、結果はしばしばドラマティックであつたし、未来にとつて大きな希望を与えている。それにもかかわらず、こうしたプログラムでさえ三つの主要局面で限定されている。

(1) 規模の限定

NGOは一般に小さな組織である。実際これがその効率性のひとつの中である。ネパールではその数は増大しているけれども、それにもかかわらず、それらが手を差し伸べることのできる人びとの数やカヴァーできる地理的エリアでは制限される。（それらはまた、その活動の質においてもかなり多様である。）カンチャンブール、カイラリ、バルディヤ、バンケおよびダングの五郡（そこではカマイヤを支援するプログラムが集中されている）では、調査はカマイヤが多数見出される約二〇〇の村があることを示した。

現在NGOの共同の努力が約三〇から四〇の村に届いている。BASEは現在ネパール最大のNGOだが、識字学級でもつておよそ一万八〇〇〇人のタルーに奉仕活動をしていて、そのうち約三〇〇〇人がカマイヤである。⁽¹⁰⁾インセックはその非公式教育学級で毎年約一二〇〇のカマイヤに手を差し伸べ、さらに八〇〇人のカマイヤの子供たちに接している。しかしながら、（上述の）五郡ではカマイヤ・システムの影響下にある人びとが約七万から一萬いるのだ。⁽¹¹⁾

これら五郡の外側には奴隸制関連問題に直接取り組むNGOはほとんどない。実際、カマイヤ・システムそれ自体は他の四郡で存在すると報告されているが、NGOは取り組んでいない。今のところまだハリヤ・システムはたいていのNGOによつて問題として広く認識されておらず、したがつてこの関係エリアに取り組むプログラムはほとんどない。

（2）アクセスの問題

逆説的だが、NGOが手を差し伸べて支援するのがしばしば最も困難な諸集団であるのは、とても搾取されているこれらの奴隸的労働者である。例えば、たいていのNGOのイニシアティヴは女性の積極的な参加を伴おうとするのだが、参加率は維持するのがとても困難である。カイラリのプラクタップルVDC出身のあるインセックの教員は、かれの夜間識字学級に女性がやつて来るようになるのが何故困難なのかに関して、つぎのように説明した。「もし両方（夫と妻）が学級に行くなら誰が夕食を料理するのか？」

実際、女性の観点からいえば、地主への債務奴隸の状況から逃げ出すことは、彼女の奴隸的な地位を究極的には変えるものではないかもしれない。プラクタップル出身のモティ・ラル・チョーダリーは六〇歳で最終的にかれの負債を完済することができ、カマイヤ・システムから抜けることができた。モティ・ラルはそのとき以来かれの状況が改善したと認識しているが、かれの妻のフルマティは依然家庭の雑用と自分の家のキッチン・ガーデンでの野良仕事で一日いっぱいを過ごしている。

わたしはつて生活はまったく同じです。何が違うのか？そこで働くねばならないと丁度同じように「ここで働くねばならない」。わたしの仕事の時間と義務は多かれ少なかれ同じなのです。⁽¹²⁾

識字学級に参加できるそうしたカマイヤは当然他よりも自由である。絶対的に自由な時間をもたないカマイヤの有意味な参加を

確保するプログラムを、NGOが考案することは、非常に困難である。しかし、最も援助を必要とするのはまさにこの集団なのである。

(3) 適切さの問題

最も深刻なケースでは、債務奴隸制や農奴制の犠牲者は大いにその地主の支配下にあるので、たとえNGOプログラムに参加するにしても、その附加的知識や能力を使うようにできないのである。ラム・クマリは、カイラリ郡のナンバスターVDC出身の一九歳の女性だが、カマイヤの家族の出である。彼女は負債を抱えまた彼女の地主の土地で生活している。彼女はこの二ヶ月間村のインセック夜間学級に出席し、面白いと言う。彼女は自分の名前を書け、読むことを学んでいる。彼女がつぎのように結論するとき、不幸なことだが彼女は多分正しい。

わたしは先生がいつしょに活動することについて、(13)これが好きだったし、わたしたちは権利を持つべきだと考える。しかし、地主が私たちをそうさせないだろうと思う。

(4) もうひとつ雇用の形態

たとえカマイヤがかつてそうだったよりも今はその権利を自覚しても、一年を通じて食べ物の確保をかれらに与えることができるのは自分自身の土地、あるいはもうひとつの所得創出活動がなければ、かれらはなおとてもしばしばしか、その権利を主張することができない。

NGOプログラムの結果として、システムからどうにか逃げることのできたあのカマイヤたちさえも、かれらの家族を支える他の手段を持たなければ、しばしば後日それに戻ってしまうのである。

たいていのNGOは、農村地域において育ってきた極端な不平等への長期の解決策を与えるための大規模で直接的な政府の介入がなければ、ネパールの奴隸的労働の問題にたいする永久的な解決はありえないことに気づいている。もし政府がそのすべての市民の基本的人権を保障するという国際的責務に応える予定ならば、エリート集團の政治的経済的利益を維持するという短期的アプ

ローチをとるのを避けなければならぬ。これはネペールの開発計画にとって深刻な意味を持つてゐる。

- (1) 一九九五年一〇月にASI・INSECがおこなった調査から。
- (2) 同上。
- (3) 同上。
- (4) シュタコチャラ [Jutakochala] は公衆の前での屈辱の形態である。西藏の tanning and feathering 「人間の身体一面に熱したタールを塗り、羽毛をくつけて担ぎあわる前近代の民衆的制裁の儀式－訳者」の慣行にもとく類似しているかもしれない。ここでは靴で作られた花輪が犠牲者の首にかけられ、村からの追放に先立つて、街路をぬぐつ歩めやせぬ、隣人からの侮辱や虐待を受ける。それはしばしば、実行する以上のことを約束した政治家のために保留される。
- (5) Sustainable Livelihood Forum, 1993. Annual Report I and II 1991-1992, p. 7, Kathmandu.
- (6) 一九九五年一一月にASI・INSECがおこなった調査から。
- (7) 一九九五年一〇月にASI・INSECがおこなった調査から。
- (8) Mayoux, L., 1997. The Magic Ingredient? -Microfinance and Women's Empowerment. Briefing paper prepared for the Micro Credit Summit, Washington, February 1997.
- (9) Mishra, S., 1995. op. cit.
- (10) ibid.
- (11) りれいの評価は INSEC (1992), Base (1994) による Landless Settlers' Problem Resolution Commision (1995) がおこなったもので主要調査による。
- (12) 一九九五年一〇月にASI・INSECがおこなった調査から。
- (13) 同上。

第一〇章 政府の行動

ジャガナート・アチャリヤ氏は一九九〇年モクラムの回復後の最初の会議派 [ネペール・コンクレス] 政府の土地改革相で

あつた。かれはたつた数カ月後に職を解かれた。当時の新聞報道は、その解職はかれが封建的な土地所有諸形態のあるものに公然と挑戦しようとするつもりであった、という事実と関連していると観測した。かれは最高の清廉さをもつてかれの省務を遂行した政治家として、政治分派の両陣営から広く尊敬されている。そうすることでかれはネバールでの変化を挫折させる諸権力と直面することになったのである。かれの見解は暗く非常に反語的ではあるけれども、からならず真剣に考えなければならない。

「わたしたち政治家は安物の人気を必要とする」、また政府を形成するには投票が必要だ。土地改革はとても人気あるスローケンだが、それはそれ以上のものを必要としない。

わたしたちはなお封建的社會のなかにいる。低位階級の間には劣等感がある。われわれ政治指導者や教育を受けた人たちやNGOの活動家たちは高い階級の出身で、より低い階級のものが解放されるのを認めようとしない。われわれは自由で独立した國であることを主張するが、たいていの人ひとはそつではない。われわれは権力を行使し、そしてかれらにそれを譲渡しようとしない。

「われわれは人道主義者だ」、みんなが「のスローケンをつく。しかしそれが實際には平等主義的社會を望んでいない。
社會を變へるには時間がかかる。われわれには一種の社會革命が必要で、それには時間かかる。⁽¹⁾

一九八九年、国王は極西ネパールのカマイヤ・システムを調査するため委員会を設立した。委員会は、そこには奴隸はいないと結論した。ある調査研究員に質問され、委員会の一メンバーはこうコメントした。タルーのカマイヤは、

「無知で、なかには急け者で飲んだくれもある。もしかしたらその生活を止めたいとか、もうひと所懸命に働くべきだ。⁽²⁾

一九八九年の非政党のパンチャヤート・システムを投げ捨てた運動は、多党制システムだけでなく、また人権の導入をも見たい

という願望に動機づけられていた。

その後の諸政府は、したがつて、人権の擁護に関わっているということを公衆の前に示すために苦労してきている。

一九九二年、カマイヤ・システムの調査を公刊した後、インセックは大きなロビング活動と意識向上キャンペーンをはじめた。二年後そしてネパールで奴隸制廃止が宣言されて七〇年後に、統一マルクス・レーニン党（UML）の政府が国にはなお奴隸制の一形態が存在することを公式に認めた。今ではすべての主要政党が原則としてカマイヤ・システムの廃止にコミットしている。新しいUMLとRPPの連立政府は、債務奴隸制に反対する行動を表明した最新のものになる。

政治家たちはこうしたコミットメントを行動に翻訳することがひどくゆっくりしている。主な政府の行動は、これまでのところ、土地なし問題に取り組むためのより広範なイニシアティヴの一部になつていている。

スカムバシ・アヨグ（土地なし居住者問題解決委員会）

スカムバシ・アヨグは、土地なしによつてもたらされた諸問題を調査し、事態を改善するための政策を勧告するために設立された政府任命の委員会である。それは、パンチャヤート体制を含むさまざまな政府のもとで、さまざまな時代に機能してきた。近年では、それは無断居住者の居住地の問題に焦点を当てている。一九九〇年に土地を持たない農業労働者が、その多数は丘陵部やテライのハリヤあるいはカマイヤであるが、組織的なやり方で使用されていない政府の土地に無断居住をはじめた。かれらは重要な諸河川や森林際の傍の端地を占拠し、自分たち自身の居住地を作り出した。政府はそれ以上の森の不法占拠を元気づけるのを望まず、また、そのカマイヤやハリヤが農場を去るのを見た地元の土地所有者に促されて、最初はその訴訟手続きを省略し居住地を解体するために行動した。これが長期の解決策を提示するものではないことが明確になつた時、当時権力を握っていた会議派の政府は宥和政策を採用して、無断居住者が恒久的な居住地を築くため、森林地域から離れた不使用の政府の土地のエリアを割り当てた。一九九四年の終わりにネパール共産党（CPNUL）が権力を握った時、それはスカムバシ・アヨグが奴隸的労働問題に取り組むためにアプローチする可能性を見出した。スカムバシ・アヨグは、土地を持たない人びとが無断居住している土地を登録するのを認めるか、あるいはかれらにもうひとつ土地を提供するのを認めるかのために、ネパールの七五の郡のふたつを除くすべてで、かれらの調査を遂行せよという広範囲の命令を与えられた。スカムバシ・アヨグはカマイヤの問題に取り組む別のプログラム

を組み入れた。負債も持ちかつ地主の土地で生活もしている五三五六のカマイヤの家族を見きわめる詳細な調査が遂行された。⁽³⁾ このグループは、行動にとつて優先的なものと見なされ、カンチャンプル、カイラリ、バルディヤ、パンケそれにダングの五郡のそれぞれのモデル村にこのカマイヤ・グループを再定住させるために、四〇〇万ネパール・ルピー（七二万U.S.ドル）かかる計画が企画された。スカムバシ・アヨグは、カマイヤの負債について文書的証拠が存在しない場合には、かれらを拘束することは考えるべきではない、と命じた。いかなる補償も地主に払われないことになった。

レシャム・バハドゥル・チヨーダリーはバルディヤ郡のカナリ河の土手に無断居住する土地を持たない人びとの組織の代表であつた。

われわれのエリヤには約一万八〇〇〇人がいた。人びとは土地を持たない農業労働者であった。かれらのたいていはカマイヤであった。われわれは耕すべき牛を持たなかつたから、人びとを使わなければならなかつた。

郡の地主たちは、かれらのカマイヤが逃げ出してわれわれに加わるので、たいへん怒り心配した。かれらはわれわれを泥棒で「うつきだと非難」した。われわれが爆弾を製造しているとか、われわれはインドからやつてきておりネパール人でないとおもひつた。

一九九一年の遅くに、政府は居住者にエリアを去り、家を解体するように命じた。

軍隊がわれわれの家を解体するために七五の郡からやって來た。六時までにかれらは七頭の象と三十六頭のブルドーザーを使ってあらゆるもの破壊してしまつた。かれらはわれわれの家を破壊するのに数十万ルピーを費消した。その金は恒久的な方法で問題の解決を助けるために使うことができたのだ。

追い立てられた後、コミュニティの指導者たちはハンガー・ストライキを続けた。かれらの窮状と蒙った明白な不正義がメディアの見出しへなった。二七日後政府はその対決的姿勢を転換し、農業相のサイラジャ・アチャリヤが和解交渉のために派遣された。スカムバシ・アヨグの援助を通じて無断居住者たちは村を築くための一ブロックの政府の土地を与えられた。

レシャム・バハドゥルは誇らしげに述べる。

この新しい村はレシャムブルと呼ばれている。RNN（農村の再建と発展、農業コミュニティで活動するNGO）が資材を提供し、八〇日でわれわれは五一軒建てた。八七家族が今では土地を受け取っている。大変困難だつたがしかし今ではわれわれはどうどう自分自身の一片の土地を持ち、そしてわれわれは犯罪者ではないことを証明したのだ。⁽⁴⁾

スカムバシ・アヨグは、奴隸的労働者や土地を持たない人びとのリハビリテーションのために、政府の土地を配分する相当の権力を与えられていた。カマイヤ計画のために必要とされた一〇〇〇万ルピーから四〇〇〇万ルピーが配分された。一九九五年九月にUMLが権力を失つた時までに、一〇〇〇人より少ないカマイヤが土地を受け取っていた。そしてモデル村はひとつも建てられていなかつた。それにもかかわらず、ネパールのほとんど六万の土地を持たない家族がかれら自身の名前で登録された土地を与えられた。

次の連立内閣はスカムバシ・アヨグを解散し、UMLによってはじめられたカマイヤ計画を終わらせた。スカムバシ・アヨグの責務のあるものは土地改革省に移された。

一九九六年、土地改革省は同様の五〇〇〇人の土地を持たずそして負債を負つてゐるカマイヤの問題に取り組むために、異なつた諸提案を発表した。これらはカマイヤに適切な教育諸施設、家族計画のアドバイス、低利のローンおよび所得創出計画を提供することを目指していた。提案された所得創出計画は、技術あるいは取引の訓練や、豚や兎の養殖のようなさまざまな形態の畜産業を含んでいた。それに加えて、カマイヤにたいし、理論においてはその期間までに自給自足できるようになつたであろう一五年という期間で、一片の政府の土地を提供するという提案があつた。しかしながら、プロジェクトの論争的になつた部分は、カマ

イヤの負債の返済にあたってかなりの支出が地主に行くべきだという提案であった。これはNGOからの批判を受け、だれが計画の真の受益者になるかに関して混乱を招いた。

最低賃金

一九九二年政府は労働法を導入したが、それは以前の工場および工場労働者法（一九五九）に代わるものであった。労働法は最低賃金について規定し、それを施行しているが、これはほとんどつぱら産業セクターを取り扱っている。それゆえ、事実上ネパールの労働力の大多数について最低賃金は存在しない。

労働省は、経済・技術研究センターや国際労働機関（ILO）と協力して、一九九五年九月一日から一二月三一日までネパールの農業労働者の最低賃金について研究をおこなった。

研究は最低賃金を食物や衣類や医療を含む最低限の一日生活料金と定義した。それはこれにもとづいて丘陵部とテライの両方で最低賃金のレヴェルを設定しようとした。それは、丘陵部で六〇ネパール・ルピー（一・〇八USDドル）、テライで五〇ネパール・ルピー（〇・九〇USDドル）のレヴェルを示唆した。しかしながら、これらのエリアで支配的な現実のレヴェルは実質的にはより低いとみられた。

土地改革

理論においては左翼政党も右翼政党も土地改革にコミットしている。これは投票する公衆に人気のある主題であり、政治的戦場になつてきている。しかしながら各党は「土地改革」という言葉を異なつて解釈する。そしてCPN(ML)を除くすべてが土地再配分を主張するまでにはいたらない。

CPN(ML)は一九九四年の終わりに権力を持つたが、それは土地改革をその開発政策の最重要部分にし、詳細な提案を発展させるため委員会を設立した。土地改革委員会はそこで自らのものとは違う他人の土地で働く一〇〇万の農業労働者がネパールになると評価し、この集団を、極端に貧困であり政府援助を優先的に受けるものとみなした。それは土地のない農業労働者の家族がその家計を維持するのを可能にし、また少額の販売利潤を見込むのに十分な土地を配分することを提案した。これが大部分の農村人口の購買力を増し、そして基本的な主要産物とは異なつた、付加価値のある農業製品のための新市場の成長を促すだろうというの

が理論的根拠だった。これは農・企業の促進を助け、以前の農業労働者のためにもうひとつの雇用機会を創り出し、そして以前の地主が進んで投資するようなビジネスの機会を創り出すだろう、ということが論じられた。

再分配のための目標になつた大部分の土地は、政府の所有する未耕地エリアからなることになった。さらに、地主が合法的に所有することを認められる最大限の土地は減ぜられることとなり、その剩余分は国家資金で購入され土地を持たない者に再分配されることとなつた。政府によるこれらの土地の強制的購入は、大土地所有者がかれらの資産のあるものを整理することを余儀なくさせ、それを農・産業的プロジェクトに投資するよう促されるだろう。

提案は、少なくとも理論においては、ハリヤやカマイヤの奴隸的労働者問題に直接取り組むような積極的で基本的な変化を約束するように思われた。改革が成功したかどうかは純理的な問題である。委員会はCPNUMLが一九九五年に権力を失う直前にその報告書を提出し、公刊されなかつた。書いているときには、新しい連立政府が計画された改革を復活させるかどうかはまだ分からぬ。一九九六年に形成されたネパーリ・コングレスとRPPの連立政府は、土地改革についてあまり野心的でない提案をした。その主要な目的は、広く借地協定下にある一定割合の土地所有権を即座に、借地農に直接与え、そして以前に分益小作システムにおいて存在していた榨取関係のあるものを廃止することであった。土地改革省は所有權あるいは借地權を、土地を持たない農業労働者に認める意図がなかつた。それゆえ、改革はハリヤやカマイヤの奴隸的労働者を益するものではなかつたろう。

デモクラシーの再建直後には民衆の期待は高かつた。最初の幸福感は、——かならずあるものは言つたものだつたが——それ以来幻滅感に道を譲つた。確かに、少数で連立の政府が近年連続したことは弱い政府をもたらし、政治的には好都合であるかもしれないが、奴隸的労働に長期的解決を与えないような政策を生み出した。奴隸的労働に取り組もうとする試みは、その結果、交渉によって作られた袋小路は、より大きな責任をNGOに負わせさえしている。NGOは、国民的闘争を開き、人権侵害に対し解決をもたらすような方針にそつて政府の行動を監督するのを助けるという役割を持つだけでなく、また問題解決を勝利に値する政治的賞品にもするような役割を持つのである。終章において述べられる勧告は、こうした明白な目標を意図している。

(1) 一九九五年九月にAのA・AのEがおいたダイハタカ。

(2) Skar, H. O., 1991, p. 32, op. cit.

(3) Landless Settlers' Problem Resolution Commision, 1995, p. 12, op. cit.

(4) ibid.

第四部 結論と勧告

第一一章 結論と勧告

ネパールの農村は分裂している。この分裂はカースト・システムと土地所有構造にその基礎がある。それは女性が伝統的に奴隸的な地位をもつて世帯単位それ自身にさえも及んでいる。

政策作成者や立案者は、そもそもグループの村民たちへの開発効果を考慮することなく、村落開発評議会（VDC）をネパール開発戦略の基本単位と考える傾きがあった。その結果、開発のイニシアティヴはしばしば決定作成過程において代表されそうにない村の最も弱くて最も周縁化された人びとの諸問題に取り組むことができなかつた。それどころか、開発のイニシアティヴは地元レヴェルで土地もちのハイ・カーストのエリートの力を強化しがちであった。

これらの分裂が立案者に認識される場合でさえも、それは開発とともに単純に消滅するであろうと信ずる傾向がある。これは危険な自己満足の形態である。ネパールの「開発」の四〇年は旧構造を多かれ少なかれそのまま残しているのである。それは、多党制政治システムの確立以降でさえも、変化にたいして抵抗的なことがわかつてゐる。もつと重要なことだが、カーストや土地所有の構造（そしてそれに伴う差別や搾取）は、低開発の産物とみなされるよりも、実際にはその主要原因とみなされるべきである。それはネパールの人的資源の開発とそれに伴う農村経済の成長に巨大なブレーキとして作用してきた。村落レヴェルで開発イニシアティヴを遂行する責任をもつその当の人びとは、通常エリートの出身で、社会の最も貧困な部分を従属的で貧困状態にしていることからその力を引き出している人びとのなのである。

奴隸的労働の問題はいくつかのNGOによって取り組まれている。しかしながらこれまでのところ、その努力は西部テライの五

郡におけるカマイヤ・システムにのみ向けられてきた。そのプログラムは、関連するカマイヤ諸集団にエンパワーすること、問題を公表すること、そして政府に行動のための圧力をかけることに非常に効果的であった。インセックやASIによつて企てられた調査は、債務奴隸制や農奴制が国のある辺鄙な地域に限定されるのではなく、少しずつ異なつた形態で多くのさまざまな郡において存在することを立証している。

奴隸的労働は、このような規模で人口のかなりの部分の基本的な自由と権利を削りとり、多党制デモクラシーの発展を妨げている。ネパール政府には、この人権の全体的な虐待を終えるべく行動する明確な義務、より広範な国際的コミュニティには、このような動きを支援する対応的義務がある。インドやパキスタン両国での経験は、奴隸的労働と他の奴隸制類似の慣行を廃止する国家法を導入することの重要性を示している。両者のケースでは、関係政府当局はこのような法律の執行においてしばしば非効率的でえり好みをするが、他方、法律はNGOによって非常に効果的に用いられてきた。その上、この法律は公的資源をこの問題へと導入するための本質的な枠組みを提供し、該当する政府諸機関に指令を与えるのである。

こうした理由で、この報告の主要な勧告は奴隸的労働と奴隸制類似の慣行を廃止する国内的立法の導入をめぐるものなのである。

I. ネパール政府への勧告

A. 奴隸的労働と他の奴隸制類似の慣行を廃止せよ

一九六三年ネパールは奴隸条約（一九二六年）と奴隸制度、奴隸取引並びに奴隸制類似の制度及び慣行の廃止に関する補足条約（一九五六年）に批准した。

後者はとりわけ奴隸的労働と農奴制の慣行を禁止している。政府はこれら国際的な人権諸条約を履行するため措置をとるべく国際社会への義務を負っているが、しかしこまでのところ法律によつて奴隸的労働を禁止していない。したがつて政府はその国際的公約を満たすことができていない。

A. 1. ネパール政府は、一三五力国が批准している、国際労働機関の強制労働に関する条約二九号（一九三〇年）を批准することによって、負債労働も他の形態の強制労働も廃止するというその公約を示すべきである。これはILOの「中核的諸条約」のひ

とつであり、それを批准できないということは、いくつかの最も基本的な労働基準を擁護するという公約が欠けていることを意味する。

A、2、ネパール政府は、問題の絶滅にむけての最初の本質的措置として、すべての奴隸制類似の慣行を廃止する法律を導入すべきである。この法律は国連の奴隸制に関する補足条約（一九五六年）に含まれた定義によりすべての奴隸制類似の制度と慣行を禁止すべきである。

それは犠牲者のリハビリテーションをおこない、将来奴隸的労働を搾取する地主もしくは他の雇用主を処罰するために、犠牲者の身元確認を規定すべきである。それはまた債権者のために個人あるいは家族を現在拘束している負債を取り消す効力をもつべきである。

政府は奴隸制および奴隸制類似の慣行を禁止し処罰するという憲法上の約束に挑戦して最高裁判所に提訴されている事件の聴聞を促進すべく、迅速に行動すべきである。

B、土地改革

奴隸制類似の慣行にたいする立法は最初の本質的な措置であるが、それはそれ 자체では奴隸的労働を終わらせるのに十分ではないだろう。奴隸的労働と農奴制の犠牲者は、家族を支えるに十分な、そしてさらに大きな負債を背負って奴隸状態に再び落ち込む必然性を避けるために十分な所得創出の手段を認められるべきである。

B、1、ネパール政府は、奴隸制の犠牲者のリハビリテーションのために提供可能な土地あるいは他の資源を作り、自分自身やその家族を支えるかれらの現有の技能や知識を用いることができるようすべきである。この目的に適当な未使用の政府の土地が土地改革省によってすでに確認されている。現在合法的に認められた最大限を超えて所有されている土地の強制的購入は再配分のための付加的な土地を生じるであろう。

C、最低賃金

一九九二年の労働法は産業部門における最低賃金と労働条件を規定するが、法は、いくつかの政府所有のプランテーションの場合を除いて、農業には及んでいない。一九九一年のムルキ・アイン（民法典）によれば、被用者が無料で働いている時さえも、労働条件と支払料金は雇用主と被用者が決定すべき問題である。法的な最低賃金は農業労働には適用し得ないのである。

C、1、ネパール政府は農業労働の最低賃金を導入し、最低限でも食糧や衣料や医療支出を含む日常生活料金を決定すべきである。

D、カースト差別

カーストを理由とする差別はネパールでは非合法である。しかしながら法律はこの点で日常的に無視されている。「アンタッチャブル」カースト出身の人びと、特に農村地域出身の人たちは、日常的に地元の政策決定過程で平等な役割をはたすことから排除され、社会から周縁化されている。このことはこれらの集団が奴隸制類似の慣行にさらされやすくしている。加えるに、「アンタッチャブル」諸集団は、慣習によつて、伝統的なカーストの役割以外の職業に従事することを妨げられ、その代わりに奴隸的な仕事をおこなうように強制され、それは日々支払なしである。

D、1、ネパール政府は、カースト差別に関する法律が農村地域に適切に執行されることを保障するよう行動すべきである。このことは、ネパールにおけるカースト諸集団とエスニック諸集団との間の平等性を促進するため、新しい手続きの採用もしくは特別委員会の設立を要求する。

E、医療費のクレディット

この調査の過程でおこなわれたインタビュー やグループ討論から、奴隸的労働者が最初に非公式のクレディット源に頼った主要な理由は、結核治療や他の重大な医療状態の支払いをするためだつたことが明らかになつた。このような規制のないクレディット源は一般に非常に高い利子率を招くし、債務奴隸状態へ導き得るものである。

E、1、ネパール政府は、例えば据置き払い制度もしくは規制のあるクレディットのような、医療施設への代替的支払手段を農村の貧者たちが見出すのを助ける方策を導入すべきである。

II、ネパールの非政府組織（NGO）や労働組合およびネパールで活動する国際的非政府組織（INGO）への勧告

A、唱道

A、1、NGOや労働組合は奴隸的労働に対して手を打つよう政府を説得する闘いをおこなうべきである。すでに奴隸的労働に政府の注意を向けるために活動するNGOや労働組合の強力な全国レベルの結束が存在する。これは、そこから、国のあらゆるエリアにおける奴隸制類似の慣行を廃止する立法を導入するよう、ネパール政府に一致したアピールをするのに理想的な演壇である。ハリヤの農業労働者の奴隸的労働について討論を促進し、また、要請時におこなうさらなる調査を調整するために、共同行動を企てることができるであろう。

さらに、ネパール政府にたいして、教育や政府雇用や法の執行において、「アンタッチャブル」や低地位のエスニック諸集団を採用する積極的差別を導入せよとのアピールがなされるべきである。特に農村地域において、また奴隸的労働の諸問題に直接関連して、「アンタッチャビリティ」の慣行にたいする闘争が強化されるべきである。

B、NGOのプログラム

B、1、NGOは、カンチャンプル、カイラリ、バルディヤ、バンケ、ダングにおける奴隸的労働のカマイヤ・システムへの取組みで多くの経験を蓄積してきた。NGOはこれらのプログラムの拡大を考えるべきである。最初は、他の形態の奴隸的労働が支配的である丘陵部やテライの一あるいは二郡をカヴァーするのである。これまでに成功だとわかつたことを基礎にして、これらのプログラムは以下のものを含むべきである。

- ① 非公式の識字プログラムや夜間授業を通じての、意識の覚醒、グループ形成、人権教育
- ② 所得創出、クレディットと貯蓄計画
- ③ 奴隸的労働の家族における女性の個々の状況への特別の注意

III、ネパール外の諸政府その他への勧告

A、1、諸政府と政府間の諸機関は、奴隸的労働と他の奴隸制類似の慣行を明示的に禁止する国内立法を導入するようネパール政府を説得し、この点について同政府が請け負った国際的公約に敬意を評すべきである。

B、1、ネパールで活動する政府のおよび政府間の開発諸機関はこのような立法の草案化と執行においてネパール政府に技術的援助を提供すべきである。それらは、関連諸集団をリハビリするためのプログラムを開発するため、適切な諸省や適切な地元の非政府機関とともに活動すべきである。

C、1、特に労働組合諸組織は強制労働に関する国際労働機関条約第二九号を批准するようネパール政府を説得すべきである。それらはまた農業労働に関する最低賃金を導入せよというネパール政府へのアピールを支持すべきである。それらは、GEFONTのような地元の諸労働組合やネパール労働組合連合を支援して、すべての形態の奴隸制にたいする彼らの闘争において、ネパールの農業労働者を組織するというプログラムを支援すべきである。

（以下 略）

付録一

面積、重さ、通貨

付録二

用語集

付録三

参考図書抜粋

付録四

奴隸的労働で活動するネパール内のNGO

（完）